

第208回aacaフォーラム：パブリックアートの今

フォーラム委員会

開催日:2025年3月21日

登壇者:German Suplex Airlines、菅隆紀さん、
山崎和子さん

ファシリテーター:萩尾昌則(委員長)

会場:PARCs Sangetsu Group Creative Hub

今回のフォーラムは、株式会社サンゲツ様の日比谷公園を一望する施設をお借りして開催しました。テーマは今日的な意味での「パブリック」と「アート」の関係性。3組4人の先鋭的なアーティストのご登壇のもと、活動紹介と鼎談が行われました。

制作集団German Suplex Airlines(以下、ジャーマン)の前田真治さんは尼崎を拠点に、地域課題の答えをアートを手段に導き出します。作品のプロダクティブや装飾的な美よりも、コミュニケーションを介して起こる自然発生的な現象を重視。制作は参加者にも委ねられ、前田さんは「アートは作家のものではない」と語ります。「誰とどう向き合うかが最も大切」との言葉からは「社会を信じている」ことが強く感じられ、その活動が周囲の未来をかたちづくる契機になっていることが、現代的な意味での「パブリックアート」の意義を示しています。

ジャーマンの風間天心さんはアーティストかつ僧侶。前田さんと共に実施した「ビッグブッダプロジェクト」で、人々が仏像に大切な想いを綴ったお札を貼る姿は「祈る」姿そのもの。祈りとアートを関連づけることにより、信仰が身近なものとして存在し得ることが認識できます。プロジェクト最終形として大仏は山口県のお寺に寄進され、祈りのシンボルかつアート作品として展示されています。それらの共存は現代的な信仰とアートのあり方を提示しており、日本の「宗教と芸術」の関係性の再考を促そうとする強い姿勢を感じました。深い対話を促す風間さんの眼差しから、想いを共有する大切さや共存への希望が感じられます。

菅隆紀さんは、「その場所」に拘った制作を行っています。ある時はアリゾナまで単身渡航。ナバホ族と交渉し現地の砂で地面に広く制作した作品は、完成し



鼎談風景(左から山崎さん、菅さん、前田さん、風間さん、萩尾さん)



懇親会の様子

た瞬間に全てが風とともに消えてしまう究極の儚さを含んだもの。異文化の知恵を借り、自らの殻を破るように、他者としっかり向き合い対話を繰り返します。「共通の何かを探し出すことが重要」と語る菅さんの活動は、人間の根源的な行為にアプローチし、自分以外の「世界」の発見を私達に示し続けています。

染色造形家の山崎和子さんは、友禅染をベースとしたシャープな形と色彩により、近年は国境を超えて広く活動し評価を得ています。海外での子どもを対象にしたワークショップの様子を見ると、山崎さんの温かさは多くの人に喜びを振る舞っているようです。「作品が自分の想いを超える新たなストーリーで誰かの人生に彩りを加えられたら、作者冥利に尽きます」と語る山崎さん。山崎さんにとってのパブリックの意義は、対局であるプライベートの中に潜在しているようです。

鮮明化したのは、世の中との向き合い方を考え続けることが大切で、それを体现する場がパブリックであり、各々の作品が多様な意味での「パブリックアート」だと

いうこと。狭義の既成概念が崩される話の連続でした。

萩尾さんの「豊かなデザインに溢れている現代において、みんなのための居場所と感じられるパブリックスペースが減っているのは、国際競争力の向上こそが都市再開発の真の目的とされるから」という要約は新鮮な視座でした。また個の場に公の要素を持ち込む「アートの推し活」に可能性があるという提言はユニークで、好きなアートを愛で、そして他者の「好き」を尊重するような多元的価値を社会に見出せれば、希望ある未来を信じられると思いました。

閉会後は懇親会を開催。「アートの推し活」話にも花が咲き、有意義な交流の場となりました。(副委員長 市村陽子)



日比谷公園と都心景観を一望する会場からの眺望